

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009 ～ 2013

課題番号：21401036

研究課題名（和文）フレデリック・スターの東アジア調査に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study of Frederick Starr's East Asian Research

研究代表者 宮武 公夫（MIYATAKE KIMIO）

北海道大学・ — ・名誉教授

研究者番号：50291993

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は 1904 年に初来日して以来、13 回も訪日した人類学者フレデリック・スター（1858-1933）による東アジア調査の全容を明らかにし、その現代的意義を再評価するものである。スターは日本の歴史文化に精通し様々な階層の人々と交流し、多くのコレクションを残したが、そのほとんどは知られていない。本研究は国内外の関係資料を調査することでスターの東アジア調査について総合的に明らかにし、その研究の現代的意義を再評価した。

## 研究成果の概要（英文）：

This research project focuses on Frederick Starr's (1858-1933) East Asian research. Starr was a prominent anthropologist in the USA and visited Japan 13 times from 1904 to 1933, made nationwide personal networks and large collections. But most of his research detail is forgotten today. This research project revealed the detail of his research by his field notes, diaries, letters, books, collections in Japan, USA and Korea and reevaluated the theoretical importance for contemporary anthropology.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2010 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2011 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2012 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
総計	11,100,000	3,330,000	14,430,000

研究分野：人文学 C

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：人類学・民俗学・東アジア・米国・近代・明治・大正

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は 1904 年のセントルイス博覧会におけるアイヌ展示の研究を通してスターの調査を始めたが、本研究は 1904 年に初来日して以来、1933 年に東京で死去するまで

来日を繰り返し、日本、朝鮮、満州の調査をおこなったフレデリック・スター（Frederick Starr, 1858-1933）による東アジア調査の全容を明らかにしようとするものである。スターは 1892 年にシカゴ大学の初代人類学教授

として就任し 1923 年に退職するまで、米国で最も著名な人類学者の一人であったが、現代の人類学史では前近代の人類学者であり、そのコレクションのほとんどは散逸し、学問的業績もほとんど残さなかったといわれる。しかしスターは、その研究者としての後半生のほとんどを東アジア調査に費やし、日本・朝鮮社会の様々な人々と交流し、歴史、社会、地理、文化などのあらゆる側面を知悉し、スターが日本・朝鮮各地を行脚する様子は新聞紙上で報じられ、戦前の日本社会では「お札博士」として広く知られた米国人だった。さらに政財界の著名人とも交流を持ち、1921 年には勲三等瑞宝章を授与されているが、その東アジア調査の全容については日米双方でほとんど知られていなかった。また、現代の米国文化人類学史では、旧世代の人類学者であり、同時期に活動したスターに対するボアズ理論の「科学的」正当性とスター在任中のシカゴ大学人類学部の学問的停滞が指摘される (STOCKING Jr. 1968, DARNELL 1998)。しかし、このような批判は、米国人類学史におけるボアズ派を中心としたホイッグ史観による一面的なものである。スターは日米で制度化された人類学界や相対主義的な文化研究には関心を示さず、人々との交流や実践に価値をおくとともに、広範な在野のネットワークを作り出し、納札、玩具、書籍、絵馬、絵画などの収集に強い関心を持っていた。しかし、スターの東アジア調査に関する従来の研究は、その人類学における好事家的側面や江戸趣味に注目した人々のネットワークに注目するか (山口 1995)、アイヌ研究に注目するのみで (小谷 1994、宮武 2008)、長期にわたる東アジア訪問の実態やその広範なコレクション、各地の好事家や研究者とのネットワークの詳細についてはほとんど知られておらず、現代の人類学研究における意義

について検討されることがなかった。

## 2. 研究の目的

本研究はスターが 30 年近くにわたっておこなった、日本、朝鮮、中国・満州における膨大な調査について、スターの収集した膨大なモノのコレクション、あるいはスターの生み出した人のネットワークについて、国内外の資料によって総合的に明らかにしようとする。それは、現代における低い学問的評価にもかかわらず、その人類学研究の重要性は、制度化された近代的学問・教育制度の構築や、文化を中心とした理論構築にではなく、30 年近くにわたる東アジア調査において構築された人やモノのネットワーク、あるいはその調査実践の過程そのものにあると考えられるからである。特に、「社会」や「文化」を鍵概念とした「近代人類学」を相対化し、趣味人や好事家と未分化であった初期の人類学からの異なった発展可能性を、モノと関係性を重視したスターの人類学に探ることが可能である。

また、スターの政治的側面についてはほとんど研究されないが、スターは東アジア調査をはじめ以前から、半人種差別、反帝国主義的発言をおこなっている一方で、アイヌ研究 (1904) ベルギー領コンゴの調査 (1905～1906 年) に続いて、東アジアの調査を本格化させた 1910 年以降は、ベルギーや日本の植民地支配に理解を示している。このように複雑な政治的立場の背景としては、植民地主義との妥協や政治指導者との個人的親交、行動的でリベラルな宣教師であった父の影響が考えられるが、その確認も本研究の目的の一つである。

スターの東アジア調査は、長期の参与観察をもとにした米国人類学者による最初の本格的な日本研究であり、その調査方法や結果

は「日本文化」を明らかにしようとするベネディクトの日本研究とは全く異なったものである。このように本研究は、スターの東アジア調査の詳細を明らかにすることで、スター以降の社会・文化人類学や日本民俗学を相対化し、新たな人類学研究の可能性を探ることが主要な目的である。

### 3. 研究の方法

スターの蒐集した日本、朝鮮、中国などのコレクションのほとんどは、生前あるいは死後に売却・寄贈されて散逸している。その中でスターの東アジア調査資料は次の二つに分けることができる。(1) スター自身が所有していた資料で、そのほとんどが日本での客死のあと親族により米国の研究機関などに寄贈・売却されたものである。その中で第一の資料としてあげられるのは、①シカゴ大学のスペシャル・コレクション Frederick Starr Papers として残されている、書簡、フィールドノート、備忘録、新聞・雑誌のスクラップブック、写真などである。これらの100箱近くの資料はスターの死後、親族により寄贈されたものであるが、これらは20世紀初頭の日本を中心とした東アジア調査における詳細な記録として重要である。これらの資料をもとに、1904年から1933年における、スターの日本調査、朝鮮調査を含む、アイヌ、日本、朝鮮・韓国、中国・満州調査における具体的行動や人間関係を明らかにする。

次に挙げられるのは、②オレゴン大学に所蔵されている、納札、絵画、写真などである。これらの資料はスターの死後、バス・ワーナー・コレクションに売却されたが、その後オレゴン大学に寄贈され、現在は大学図書館と美術館に所蔵されている。これらの資料には、納札張込帖、納札単片、写真、アイヌ絵などが含まれており、アイヌ関係写真やアイヌ絵についてはすでに調査がおこなわれている

が、これまで調査がおこなわれていない資料中で最も興味深いのは、数十冊の納札張込帖である。これらは国内にも見られない、明治末期から昭和初期に至る納札文化についての纏まった資料であるだけでなく、スターが個人的ネットワークを作り出した広範囲の趣味人・納札交換会参加者を知ることができる点で重要である。さらに、これらの資料は、スターの明治末期以降のモノへの関心と、狭い学問領域を超えた市井の趣味人たちとのネットワークを知ることのできる資料であると同時に、同時期に成立した日本民俗学とスター人類学との親和性や異質性を知る上で重要な資料である。このほかスターが晩年居住したシアトルのワシントン大学でも、スター関係の資料を調査する。

第三に挙げられるのは、③ワシントン DC の米国議会図書館に寄贈されたスターの蔵書や資料である。スターの蔵書の一部は、その死後にシカゴでオークションにかけられたことが知られているが、日本の新宗教関係の多数の書籍や資料、あるいは趣味関係の資料が議会図書館に寄贈されている。これらの資料から、スターの調査した明治末期から昭和初期における日本の民間信仰に関して知ることができるだけでなく、各地に分散した納札や玩具などの趣味人との交流についても知ることができる。またワシントン DC では米国公文書館の日本・朝鮮の記録にスター関係の資料が含まれていないか確認する。

スターの東アジア調査資料で第二に挙げられるのは、(2) スターとのネットワークを生み出していた日本各地の趣味人や調査協力者のもとに残された資料である。それらの中で主なものとしては、次の資料が挙げられる。①第一に挙げられるのは、スターの助手として長年調査に同行した九十九豊勝氏の設立した「東洋民俗博物館」所蔵の資料で

ある。その資料にはスターの参加した納札会や、スターも宗員であった当時最大の趣味人の集団、我楽他宗に関する資料が含まれていて、スターの東アジア調査の詳細について知ることができる貴重な資料である。

②第二に挙げられるのは、スターと長年交流のあった、我楽他宗員で孔版画家の板祐生が残したコレクションである。板祐生の膨大なコレクションは現在、「祐生出会いの館」に寄贈されて一部が展示されているが、その中にはスター山陰訪問時の資料、スターから贈られたモノが多く残されていて、スターと地方の収集家との交流について知ることができる。

③第三に挙げられるのは、スターが五度の富士登山の際に利用した富士山麓須走の旧大米谷旅館・米山家に所蔵されている資料である。これらは富士山を巡るスターの調査や富士講の実践、収集家との交流などを知る上で重要なものである。

これらに資料に加えて、(3) 日本、米国、韓国の公文書館、国会図書館、新聞雑誌のデータベースなどにおいて関係資料の調査をおこない、スターの東アジア調査において形成された、日本各地の蒐集家や好事家のネットワークや、日本民俗学との関係について明らかにする。またスターの東アジア調査と政治の関係についても、シカゴ大学資料や米国公文書館などの資料によって明らかにする。

(4) スターの人類学研究の理論的意義については、従来の表象や認識、イデオロギー論としてではなく、物質文化研究や実践論研究など、人とモノのネットワークや関係性、更にそのプロセスに焦点を当てた研究として捉えることが必要であり、理論的深化をおこなうための理論研究をおこなう。

#### 4. 研究成果

以上の研究目的と調査方法にもとづいておこなわれた調査対象とその成果は以下の通りである。

(1) シカゴ大学スペシャル・コレクション・Frederick Starr Papers の調査を 2009 年におこない、それらの東アジア関係の資料をもとにして、1904 年から 1933 年にわたるスターの東アジア調査の詳細な旅程と主要な出来事を整理し、時系列でデータベース化した。その結果、スターの日本訪問が従来知られていた 15 回ではなく 13 回（朝鮮満州訪問後の再入国を除く）であり、朝鮮訪問が 7 回に上っていることが判明したなど、スターの東アジア調査の過程を総合的に把握することが可能になった。

(2) オレゴン大学付属図書館および、美術館の調査を、2010 年から 2012 年にかけておこない、合計 55 冊の納札貼込帖に張られた 11,500 枚余りの納札を調査し、スターの参加した納札会とその主要な参加者を確認すると共に、資料集「オレゴン大学ナイト図書館スペシャル・コレクション／オレゴン大学付属ジョーダン・シュニッツアー美術館所蔵フレデリック・スター納札張込帖および関連資料一覧」を作成した。

(3) 2011 年および 2012 年に、米国議会図書館および米国公文書館の調査をおこなった。その結果、議会図書館には昭和初期を中心とした大本教、金光教、丸山教などの新宗教に関する資料が多く含まれていることが判明した。その中でもスターが第一次大本教事件直前（1921 年）に大本教本部を訪れた際の多くの資料や写真が含まれている。ほかには土俗、玩具、納札関係資料、沖縄訪問時の写真資料などが挙げられる。これらにより人類学者スターの民間信仰への関心を知ることができるが、これらは日本の政治・宗教の状況を知ることのできる資料であり、その側

面に関しては今後の研究が待たれる。

また、米国公文書館（ワシントン DC およびメリーランド）において、スター関連資料を調査したが、朝鮮関係の報告一部と逝去の際の通信記録のみで、米国政府とスターの東アジア調査が関係する資料は発見できなかった。このことにより、ベネディクトの日本研究などと異なり、スターの東アジア調査が米国政府とは関係を持たないスター独自の関心に基づくものであったことが明らかになった。

(4) スターが強い関心を持ち収集した主要なコレクションの一つは郷土玩具であった。また、1927年の日米人形交流の背景にスターの玩具コレクションがあったと考えられるため、2011年にボストン児童博物館で調査をおこなった。児童博物館では、スターの玩具コレクションを見ることは出来なかったが、スターとギュリック（渋沢栄一と共に人形交流の立案者）双方と交流のあった J. シャーウッドの資料を多く見つけることが出来た。また、鳥取の祐生出会いの館の調査を 2010年におこない、書簡や玩具など多くのスター関係資料を調査し、スターと国内外の趣味人のネットワークの詳細を明らかにした。

(5) 2009年と2010年には東洋民俗博物館資料の調査をおこない、スターが九十九豊勝氏に宛てた多くの書簡を見る事が出来た。これにより、シカゴの Frederick Starr Papers を資料的に補完することが可能となった。また多くの納札コレクションも残されているが、その多くはオレゴン大学の納札コレクションと重複するものである。

(6) 2009年には、静岡県小山町須走の大米谷資料を調査した。大米谷旅館には多くの著名人が宿泊していたが、1933年に東京で客死したスターの遺骨は、富士山を望む須走に遺族の意向で埋葬され、徳富蘇峰が揮毫した巨

石の墓碑が建てられている。また戦前にはスターの記念館が附属していた。現在も墓碑は残され、富士講関係の資料、シカゴ大学資料、墓碑建設時や戦後の追悼記念会の写真記録など、多くの資料を確認した。

(7) 研究期間を通して韓国国会図書館および公文書館で、スター関係の資料を調査し、スター訪朝時の新聞雑誌記事や講演記録などを調査した。

(8) 日本国内の新聞記事データベースおよび、九十九資料や Frederick Starr Papers の新聞記事をもとに、スター関係新聞記事データベースを作成した。

(9) スターの東アジア調査の理論的意義について、モナド論、アサンブラージュ論、インゴルドのラインの人類学など、従来の表象論にかわる存在論的人類学研究の意義を検討し、文化研究とは異なった人とモノのネットワークや動的プロセスに焦点を当てた存在論的調査研究として、スターの東アジア調査を捉えることが可能であることを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

① 権錫永、植民地期の「朝鮮玩具」、北海道大学文学研究科紀要、査読無、第139号、2013、1-23

② 宮武公夫、現代の人類学—ホーリスティックな存在の人類学に向けて、社会人類学年報、査読有、第38巻、2012、1-32

③ 芹澤知広、ベトナム・ホーチミン市の華人プロテスタント教会、総合研究所報、査読無、第20号、2012、31-43

④ 出利葉浩司、マンロー・テキストはなにを「返還」するのだろうか、内田順子編・国立歴史民俗博物館研究報告（マンローコレクション研究：写真・映画・文書を中心に）、査読有、第168集、2011、63-82

⑤出利葉浩司、N.G. マンローのアイヌ文化研究とそのコレクション「海を渡ったアイヌの工芸展」を中心に、南山大学オープンリサーチセンター2010年研究報告書、査読無、2010、96-103

⑥芹澤知広、Andrew Coe, Chop Suey: A Cultural History of Chinese Food in the United States、華僑華人研究、査読無、第7巻、2010、169-172

⑦権錫永、「ヨボ」という蔑称、北海道大学文学研究科紀要、査読無、第131巻、2010、139-172

[学会発表] (計5件)

①出利葉浩司、宮武公夫、海を渡ったアイヌの人々、北海道開拓記念館・歴史講座、2012年10月28日(北海道開拓記念館)

②宮武公夫、Ainu in London 1910, LSE・国際交流基金主催：日英博覧会100年記念シンポジウム、2010年6月16日(ロンドン LSE)

③宮武公夫、Ainu in London 1910, 国際交流基金主催：日英博覧会100年記念セミナー、2010年6月15日、(ロンドン国際交流基金)

④出利葉浩司、N.G. マンローのアイヌ文化研究とそのコレクション「海を渡ったアイヌの工芸展」を中心に、南山大学国際シンポジウム「ヨーロッパと東アジアの異文化展示を考える」、2010年10月9日、(南山大学)

⑤芹澤知広、The Japanese Collection of Chinese Folk/Crafts from the Historical and Comparative Perspective, Convention of Asian Scholars 6, 2009年8月6日、Daejeon Convention Center, Korea

[図書] (計3件)

①MIYATAKE KIMIO, Ainu in London: Power, Representation and Practice of Ainu Village, in Hotta-Lister, A. and Nish, I., eds. *Commerce and Culture at the 1910 Japan British Exhibition*, Global Oriental, 2013, pp.103-122

②宮武公夫、海を渡ったアイヌ先住民展示と二つの博覧会、岩波書店、2010、228

③宮武公夫、お札博士の東アジア行脚一人類学者フレデリック・スターの東アジア調査資料から、北村清彦編・北方を旅する、北海道大学出版会、2010、171-199

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮武 公夫 (MIYATAKE KIMIO)  
北海道大学・一・名誉教授  
研究者番号：50291993

(2) 研究分担者

出利葉 浩司 (DERIHA KOJI)  
北海道開拓記念館・学芸第二課・研究員  
研究者番号：40142088

(3) 研究分担者

権 錫永 (KWEON SEOK-YEONG)  
北海道大学・文学研究科・教授  
研究者番号：40301858

(4) 研究分担者

芹澤 知広 (SERIZAWA SATOHIRO)  
奈良大学・社会学部・教授  
研究者番号：60299162